

---

# 窓辺

bluewind

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

窓辺

### 【著者名】

N4056C

bluewind

### 【あらすじ】

とある田舎の学校に引っ越ししてきた少年の体験。寒い冬の教室の窓辺に、一人の髪のとても長い少年がありました。初めて見た時はチヨット不気味で怖かったけど、ふと見せた少年の弱々しげな瞳。はたして彼は……？

## (前書き)

短編小説です。

原稿用紙に清書を書いたのですけど、こいつには、その前にパソコンで書いた時のプロトタイプを載せます。細かい部分の修正ぐらいで、中身はほとんど同等です。

救いは無しの話です。後味の悪い話が苦手な方は御注意下さい。

いつか、どこかで、ある少年が体験した不思議な話です。

少年はこの秋、とある田舎の学校に転校してきました。

少年は心優しい子で、すぐに新しい皆と仲良くなりました。

そして、少年が見た、不思議な体験といつのは、その年の冬の「」と  
でした。

ある雪の降りしきる冬の午後、学校での放課後のことです。

その日は皆、すぐには帰らず、教室で笑い話をして遊んでいました。  
するとふとした拍子に、少年は持っていた鉛筆を落としてしまいました。

思わず慌てて拾おうと屈もうとしたら、別の髪の長い少年が、それを代わりに拾ってくれていました。

髪長の少年は鉛筆を差し出したので、少年は手の平を出すと、そこにそれを置いてくれました。

「ありがとう」、そうお礼を言おうとしたのですが、髪長少年は、すぐに離れていってしまいました。

そして長髪の少年は、窓辺の方に行くと、窓枠の狭い間に腰を下ろしました。

髪長少年は、少し頭を俯かせた為に、顔がはつきり見えません。

少年は何だか不気味な感じがしました。

あの黒い厚い髪の奥から、きらきらとした獣のような眼が、じつちを睨んでいるような気さえしてきたからです。

何とも気持ち悪くて、思わず目を勢いよく逸らして、慌てて周りで騒いでいた笑い話に加わりました。

しかし落ち着かない少年は、ちょっとするとすぐ、「鞄を持って帰つてしましました。

次の日、いつもよりずっと早く田が覚めた少年は、少し急いで準備をして、学校に行きました。

その日は晴れていたものの、昨日の雪が随分高く積もり、膝まで埋めて雪の中を走ってこきました。

ゆっくり向かっていると、昨日のこともありて、体から心の芯まで凍らせられるような気がしたのです。

そして少年は誰よりも早く、教室の扉を勢いよく開け放ちました。そして視線を一番、あの窓辺へと向けました。

すると、驚いたことに、あの髪長少年は、昨日とまったく同じ格好で、固まったように座っていました。

そして、同じようにその子の顔は黒く隠れていきました。

少年はしかし、今教室を出て行くことを躊躇いました。

ここで後ろを向いたら、あの髪長少年に首根っこを掴まれて潰されてしまひのではないか、という気がしたからです。

しかし扉の前にいつまでも立ち尽くしているわけにもいかず、仕方なく少年はそつと、足を擦るようにして音無く教室に入りました。少年はすぐに席に着くか迷いました。

やはり、背中を見せるのが何となく怖くて、思わず髪長少年を凝視してしまひのです。

髪長少年は依然、長い髪で顔の全てを真っ黒にして、物言わず座り込んでいます。

少年は思い切って、その髪長少年の下へ、向かって行きました。

例え不気味で怖いといっても、同じ教室にいる仲間です。

少年は出来るだけ笑顔を見せるように努めながら、ゆっくりと震える足を窓際へと向かわせました。

あと数歩という所で右手の手を上げ、少し硬い調子で「おはよう」と声を掛けました。

髪長少年は、ただ黙っています。

黒い長い髪も、びくりとも動く気配がありません。

「早いね。雪も積もって、凄く寒い」

しかし、髪長少年は、少年の姿など全く見えていないようだ、首も振らず、じっと座っているだけです。

何だか少年は、無性に腹立つきました。  
何故、この髪長少年は、掛けた一声にも応じてくれないのでしょう。  
何故、この髪長少年は、ただ黙つて窓辺に座り続けているのでしょうか。

怒りを超えて悲しくなってきた少年は、さっきまでの怖かった感情など忘れてくること踵を返しますと、自分の席に急ぐように向かいました。

そして席に座つて、苛立たしく頭を机に伏せて目を瞑り、無音の時間が数分流れた時、ふと少年は思つたのです。  
自分が転校ってきて数ヶ月、何故、何故、今まであの髪長少年のことを、知らなかつたのだろうか、と。

その日、少年は笛と運動場で、雪合戦をして遊びました。

今日は本当に天気が良く、太陽で雪が少し解け掛けっていましたが、暖かくて外で遊ぶに絶好でした。

少年は小さな身体を精一杯振つて、力強く雪玉を投げていました。  
すると、少年の手が冷たさでかじかんでしまつたのでしよう、思いがけず握りが甘く、間違つて変な方向へ投げてしましました。

そしてその玉が、これまた思いがけないところへぶつかつてしまつたのです。

後ろからでもはつきりと分かる、黒い髪長のあの子の頭の後ろに、当たつてしまつたのです。

少年は、これまでに感じたこと無いほど、強く心臓が跳ね上がりました。

少年は髪長少年が、すぐにあの長い髪を振り乱して、自分の方を鋭く睨むだろうと思い、恐れました。

しかし、です。

髪長少年は、真っ黒い頭に白い粉を付けて、微動だにしません。

そしてそれどころか、一度も振り向くこともせず、そのまま、何事も無かつたかのように足を動かし始めて、過ぎ去ってしまったのです。

少年は呆気に取られて、しばらく呆然と、髪長少年の行つてしまつた方を、ぼんやり口を開けて眺めていました。

そして、その少年の横顔に、突然特大の雪玉がぶつけられ、顔が雪塗れになりました。

「ほおっとしてると危ないぞ」

手で顔の雪を払うと、遠くに逃げながら新たに雪玉を作りつつしている友達の姿が見えました。

「よくもやつたな」

そう少年は言い返して、自分もすぐしゃがみ込んで雪を掻き集めて玉を作ると、走つてその友達の方へと追い掛けてきました。

いつの間にか少年はまた雪遊びに夢中になり、体中がびたびた濡れるまで、夕日が消えてしまつまで、走り回り遊んでいました。

そしてある日、少年はあの髪長少年について、驚くべき真実を知ることになりました。

その日は、学校の放課後、教室に皆が残つて、大切な話し合いをしていました。

それは、彼らの学級の受け持ちだつた先生が、今度の春まで退職をすることを知つたからでした。

それで学級委員の女の子が、お別れ会を開こうと言いました。皆は先生のことが大好きで、勿論皆が一斉に大賛成でした。

それで、残れる子は可能な限り、放課後に集まつて、お別れ会について話し合いすることになつたのです。

お別れ界では出し物をすることになつて、幾つか別々に班を作つて、それぞれで何をするかを決めるところまできました。

少年は仲の良かつた男の子一人と女の子一人で、一緒に班を作ることになりました。

そして何をするか、隠し芸か、手品か、それとも先生や皆が集合した絵を描いて送るか、話し合っている時でした。

男の子二人が興奮して、叩いたりしてふざけ合つている時、一人の子の肘が机にぶつかり、勢いで上に載つていた鉛筆が落ちてしましました。

二人は相変わらずふざけ合つていて、落ちたことにまったく気付いていません。

それで少年は、自分が代わりに鉛筆を拾つてあげようとした。すると、少年が拾うために腰を下ろそうと屈んだ時、先に正面の反対側から、誰かが腰を落として鉛筆を拾おうとしました。

その時にその誰かが頭を下げたので、黒い髪が幕のようにだらりと垂れたのが、少年に見えました。

よく見たら、そう、それはあの髪長少年だったのです。

少年は思わず慌てて、屈みかけた腰を一気に上げて仰け反りました。そして改めて見たら、そういえば自分はあの窓際の辺りの机に集まつて、話し合いをしていたことに気付きました。

そして、髪長少年を見ると、今は近くにいるせいか、髪長少年が屈んで鉛筆を拾つて頭を上げた勢いのせいか、前の方の髪が幾らかずれて、ちらりとその顔を見ることが出来ました。

その髪長少年の顔は、目が優しそうに見えました。

いえ、優しいというよりむしろ、何か怯えているような、そんな弱弱しさを感じさせるような、薄い湿り気を持った瞳だつたのです。少年は、驚き、慌てました。

以前、少年が感じていた、あの怖い瞳は、どこにいったのでしょうか。いえ、果たして本当に、自分はこの髪長少年から鋭い視線を感じたことがあつたでしょうか。

何か、何か違和感を感じたのです。

髪長少年は、驚き凝視している少年の視線など気にしない風に、すつとその拾つた鉛筆を机の上に置きました。

すると、ちょうどよく見れば、そのふざけ合つていた男の子が、何

かを探すように机の上を見回していたのが少年に窺えました。

そして、机に置かれた鉛筆を見た男の子は、少年に言つたのです。

「鉛筆拾ってくれたんだ。ありがとう」

思わず少年は言い返しました。

「ううん、僕じゃなくて、あの子が拾ってくれたんだよ」

そして少年は、いつもの窓枠に座り込む、髪長少年の方を指差しました。

しかし、

「あの子って？」

少年は、さつきよりもっと、不思議な気持ちになりました。

「そここの窓の所に座つてるでしょ」

「誰も、いないよ」

少年は、ますます混乱しました。

この男の子はふざけているのでしょうか。

少しむきになつて、少年は、相手を叩くような勢いで髪長少年を指差しました。

「あそここの、窓の所に座つてるでしょ」

しかし男の子はまったく要領を得ないようすに首を傾げ、

「とにかく、鉛筆探してたんだ。拾つてくれてありがとうね」

と、それだけ言つて、机の上に田を向けて、置いてあるわら半紙に鉛筆の先を向けました。

少年は呆れ顔で、その男の子の顔を窺いました。

しかしどこもおかしなところは無いようで、一生懸命、出し物に関する案を幾つか記しています。

そして振り向いて、髪長少年のいる窓の方を見ました。

髪長少年は、何事も無いよう、いつもの格好で窓枠に座り込み、長い髪で顔を隠しています。

少年は、ふと、国語の授業のことを思い出しました。正しくは、その授業で聞いた言葉を思い出しました。

座敷童、を。

でも、この髪長少年と、悪戯好きの座敷童とでは、やはり違つとも思いました。

ただ、一つはつきり分かつたのは、どうも自分だけしか、この髪長少年のことを見えないという、不思議な事実でした。

授業では、座敷童が見えたものには幸福が訪れる、とこゝろよつなことを聞きました。

果たして、自分はその幸福を「」ることが出来るといふのでしょうか。それは、少年には信じがたい話でした。

それは、座敷童が迷信だからということではなく、幸福をくれる神様のような人が、さつき見たよつた寂しそうな瞳をしているはずがないと思つたからです。

そして、少年は思い新たに、この髪長少年のことを、暖かい気持ちで見るよつにしようと思いました。

次の日。

少年はいつもより早く起きて、急いで学校に向かいました。  
勿論目的は、あの髪長少年に朝一番の挨拶をしようと思つたからです。

朝食も急いで喉の奥に流し込むように食べると、鞄を掴んで、急いで野道を駆けて行きました。

そして、早足で校門を過ぎると、ふと目の端に、何か黒い大きい物を見た気がしました。

少年は足を止めて、そっちを振り向きました。  
校門の近くには大きな桜の木が植えられていて、その見た何かは、確か桜の木の辺りでした。

黒い、細長い、あの髪長少年が、吊られていきました。

何か、幻を見ているような気持ちで、少年は見とれました。  
確かに、幻だつたのです、あの髪長少年は、自分以外は誰にも見えなかつたようです。

その幻が、今、冬の朝の冷たい風に吹かれ、木に掛けられた太い太

い紐が、寂しそうな乾いた音を鳴らしています。

朝日がその木の後ろで輝き、髪長少年は一層、真っ黒に染まつていました。

そしてその時、少年の後ろに、数人の生徒が通り掛りました。

「首を吊ってる！」

「きやあ！」

その子達は口々に、確かにその髪長少年を指差して、騒いでいるのでした。

そして皆が、恐怖に満ちた眼と、緩く曲がった笑みを口元に、湛えていました。

僕は力が抜け、膝を折り、ただただ、その死体を眺めているだけしか出来ませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4056c/>

---

窓辺

2010年12月5日03時04分発行